

## プレアボイド事例に見る薬局薬剤師の抗菌薬適正使用への貢献

先原 香織<sup>1)</sup>、池田 明子<sup>2)</sup>、武者 愛美<sup>2)</sup>、村上 紘世<sup>3)</sup>、井上 祥平<sup>4)</sup>、高田 潤<sup>5)</sup>、前田 守<sup>6)</sup>、長谷川 佳孝<sup>6)</sup>、月岡 良太<sup>6)</sup>、森澤 あずさ<sup>6)</sup>、大石 美也<sup>6)</sup>

- 1) 株式会社インファーマシーズ オレンジ薬局 西宮店
- 2) 株式会社インファーマシーズ シンワ薬局 中央筋店
- 3) 株式会社インファーマシーズ アイン薬局 宝塚店
- 4) 株式会社インファーマシーズ アイン薬局 ポートアイランド店
- 5) 株式会社インファーマシーズ
- 6) 株式会社アインホールディングス

【目的】 薬剤耐性(AMR)対策には、抗菌薬適正使用の推進が必須である。当社では、2016年に厚生労働省が策定したAMRアクションプランにより、経口第三世代セフェム系の処方割合が減少したことを報告した(第29回日本医療薬学会年会にて発表)。本研究では、当社薬剤師によるプレアボイド事例を分析し、AMR対策に貢献する抗菌薬適正使用に対する薬局薬剤師の貢献状況を確認するとともに、さらなる貢献に向けて取り組むべき課題について検討した。

【方法】 2019年1~10月に当社グループに所属する保険薬局854店舗から社内イントラネットで報告されたプレアボイド事例22,406件から抽出した経口第三世代セフェム系に関する551事例より、処方提案を行った事例を調査した。調査項目は「事例発見の端緒」、「提案理由」、「処方への反映」とした。なお、本研究はアイングループ医療研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:AHD-0066)。

【結果】 全551事例のうち450事例(81.7%)で処方提案が実施されており、そのうち431件(95.8%)で処方への反映があり、さらにそのうち345件(80.0%)で処方変更、59件(13.7%)で処方中止に至っていた。処方提案の理由は「用量誤り(37.8%)」、「副作用歴(35.6%)」の順に多く、「用量誤り」の発見の端緒は「処方箋(72.4%)」が、「副作用歴」では「薬歴(58.8%)」が最も多かった。なお、AMR対策を意識した処方提案は7事例実施されており、うち6事例が処方変更に至っていた。その端緒は「処方箋」が4事例、「患者等の聴取」が1事例、「お薬手帳等」が1事例であった。

【考察】 本調査から、経口第三世代セフェム系の処方に対する薬局薬剤師の処方提案の理由は、「処方箋を発見の端緒とした服用量の調整」が最も多く、処方鑑査等の薬局薬剤師の本来業務が、既に抗菌薬適正使用に貢献していることが示唆された。また、AMR対策を意識した事例には、服薬指導時に患者から聴取した情報やお薬手

帳等の記載情報が端緒となったものもあったことから、薬局薬剤師は処方箋以外でも得られる情報を徹底して収集し、整理し、判断することで、さらに抗菌薬適正使用に貢献できる可能性が考えられた。したがって、かかりつけ機能を発揮した服薬一元管理は、薬局薬剤師が AMR 対策に貢献するうえで大変重要と考えられる。

(第 54 回日本薬剤師会学術大会(2021 年 9 月, Web)にて発表)